

報告：古植物学コロキウム「第四紀古植物研究の現状と展望」

表題の古植物学コロキウムが去る3月28日、10:00~17:00、千葉大学理学部会議室で開催された。古植物学コロキウムはこれまで植物化石研究会が主催する研究集会として開催されてきたが、第6回を数える今回は、すでに本誌第7号でも案内したように、植物化石研究会と植生史研究会の共催というかたちで開催された。開催時期と会場の設定は、日本植物分類学会プレシンポジウムが3月29日に千葉県立中央博物館で開催されるのを折に、多くの植物分類学の研究者にもコロキウムに参加していただきたいとの意図によるものであった。参加者は50名以上に達し、世話人が十分に把握できないほどの盛況であった。

まず世話人の西田誠氏からコロキウム開催の経緯説明があり、つづいて私が第四紀古植物学の進展の背景・特異性と話題提供者の紹介を含めた趣旨説明をした。話題提供は各1時間、テーマに沿って、これまでの研究史や現状を紹介するとともに今後どのような方向性が考えられるかといった展望が紹介された。

①鈴木三男氏の「第四紀の木材化石研究」では、第四紀木材化石の研究史、地質層序の問題点・保存性を主とする試料の問題点・命名および種の同定上の問題点など研究上の具体的な問題点、および第四紀古植物学における木材化石研究の展望が述べられた。遺跡発掘の調査の増加とも関係して完新世の研究はすこぶる多くなってきたが、更新世の研究はほとんど無い状況に対して注意が喚起された。完新世の研究は主に植生の復元を中心に進められているが、更新世の研究は第三紀以前のような分類学的課題とともに完新世のように植生復元の方向性もあり、開拓の余地と意義が説かれた。また種の識別が果たして木材化石でできるのかといった根本的な問題の抽出も行われ議論を呼んだ。②相馬寛吉氏の「第四紀の花粉化石研究」では、花粉分析が第四紀の環境解析に際して有力な手段であると同時に、現在のフロラを構成する分類群の最近の進化の様相を知る手掛かりとなるとし、後者に関していくつかの具体例を用いて問題提起がなされた。たとえば、コケスギランとフッキソウの同時産出やアオキ属花粉化石の記録から種の異質性や分化の解明の糸口が得られ、その実証には大型・花粉化石記録の蓄積をベースとする分類群の時空分布の追求と地史からの情報が必要なが説かれた。どのような課題についても基本的に深くかかわる問題として、「既存するそれぞれの化石記録の基礎となった標本と比較すること、これらが意外にも、容易に第3者に利用できるよう整理されていない現状」が指摘された。③南木睦彦氏の「大型植物化石研究と前・中期更新世植物群」では、大型植物化石の特徴とそれを反映した研究方法ならびに進化生物学的研究など目的の特異性が述べられ、大型植物化石研究の最近の研究の傾向が分かりやすく紹介された。このあと今日まで蓄積されてきた前・中期更新世の植物群の内容と環境変動との関わりに関する研究成果が紹介され、植生の空間分布や古地理との関係について実際には解明すべき大きな課題が残されていることが指摘された。④大井信夫氏の「後期更新世の植物群・植生と環境」では、環境変化にともなう植物群・植生の変化、および分類群・植生の地理的分布の復元といった後期更新世における主要な2つの課題に沿ったこれまでの成果が紹介された。とくに後者については約2万年前のテフラATを鍵層として日本各地の約80の化石群から3つの植生帯が認識されるとの知見は注意を引いた。⑤松下まり子氏の「完新世の植物群と環境」では、花粉分析を主な手法として発展してきた完新世の研究スタイルの典型的な事例が紹介され、日本列島東・西部での太平洋岸における照葉樹林の成立・拡大の歴史と海況の動向との関わりを対比させることにより、照葉樹林の拡大期が海況の変動と大きく関わっていることが説かれた。

対象とする化石材料の違いや第四紀の時期の違いによって、それぞれ研究の目的や方法に違いのあることが5つの話題提供によって具体的に示されたが、南木睦彦氏によって紹介された最近の研究の傾向の中で、とくに、大型植物化石・花粉化石・木材化石など複数の器官を検査することが一般的になってきたことや、化石の偏りから当時の群集を復元しようとする研究が現れてきたことなどは、分類群の総合評価の方向性とタフオミー研究の隆盛に支えられた第四紀古植物学の一般的な傾向と言える。

総合討論では、種の認識をめぐる問題や標本をめぐる問題が盛んに議論されたが、現生の植物分類学からの分類・地理に関する問題提起とはいまだ充分な絡まりがみられず、第四紀古植物学と現生植物分類学との相互の歩み寄りと共有の課題を設定すべく日常の密接な会話の必要性が痛感された。

(辻 誠一郎)